第21回 県建築文化賞

優れた建築物を表彰し、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目指している「千葉県建築文化賞」の第2 1回作品に９点が厳選、このほど県庁で建築主・設計者・施工者に対して賞状が授与され、今後のより一層の精進に期待が込められた。

受賞者に表彰状が手渡される

高橋副知事

建築文化賞は、制度発足以来応募数１ケタ台前上方、――点が表彰されている。今年度は、52点の応募作品から、厳正な審査を経て最優秀賞１点、優秀賞３点、入賞５点の計９点が選ばれ表彰された。

総評

一般建築物の部

県建築文化検討会議
北原 理雄委員長

多彩な作品に無限の可能性

一般建築物の部の応募は32点で、学園建築関係が多かったが、それ以外にも公共施設、福祉施設、生産施設など、多彩な作品が寄せられた。

最優秀賞の「市原湖畔美術館」は、1970年に建てられた展示施設のリノベーションで、コンクリートの構造体を残し、スチール折板の壁を新入して展示室やラウンジ、ホールをつくることによって、旧施設の特色だった回遊性を生かしつつ、湖と緑の周辺環境と一体になった体験型の美術館を実現している。特徴的な空間を活用したアート作品の展示画、市民に開かれた活発なワークショップなど、ソフト面の充実も高く評価された。

優秀賞の「恋する豚研究所」は、施設である。周囲の杉林と共存し、小高いレストラン・広場から緑の眺望を楽しむことができる。福祉施設の養豚・農業をつなぐプログラムも可能性を感じさせる。

「成田高等学校1号館」は、所は、赤いコの字型の校舎。豚肉加工工場、レストラン、オフィス、広場を囲む校舎は空間的複数の機能を結び付け、採光と換気の役割を果たしている。水平性を強調した山を背景う制約された敷地のなかで、分散していた旧校舎を1つにまとめた。階建ての校舎である。中央の吹き抜けは、校舎の校舎。

「千葉大学ゐのはな同窓会館」は、ファサードが旧校舎の記憶を継承し、緑豊かな周辺環境と調和している。

入賞の「沢井製薬株式会社関東工場」は、敷地のある茂原市東郷地区は工業系土地利用の更新を進めながら田園風景を生かした町づくりが進められている。この建物は約２年をかけ、周辺の歩道整備、調整池の設置、並木や菜木などを配置することで地域環境の改善に力を注ぎ、景観を一新させた。周辺の住宅や学校と共存して、新しい工場のあり方を提示したと言える。

また日本で唯一の「くすりづくりの全てを見せる工場」が大きな特徴である。薬剤に関わる専門職の方はもちろんのこと、患者、地域住民も見学に訪れる。見学ルートは生産工程と同様とし、精密でクリーン、安全なくすりづくの全容が見られるようになっている。建物の構造は製剤プログラムに合わせて、最新の製造設備機器が縦横に往来できるよう計画されている。作業する人とくすりは製剤課程で完全に分離され、それを俯瞰するかのように見学者ルートが考えられている。

入賞

建築設計者との緻密な連携が必要だったと想像できる。

沢井製薬のロゴマークの健康増進ラインをイメージした曲面ファサードやイメージカラーを積極的に使ったサイン計画など工場の概念が払拭されている。

専門家でなければわからなかった「くすり」がより身近な存在となったといえるだろう。

▷所　在　地　茂原市
▷建　築　主　沢井製薬株式会社
▷設　計　者　大成建設株式会社一級建築士事務所
▷施　工　者　大成建設株式会社千葉支店

一般建築物の部

■ 沢井製薬株式会社関東工場

《地域に開かれた「くすりづくりの全てを見せる工場」》

敷地のある茂原市東郷地区は工業系土地利用の更新を進めながら田園風景を生かした町づくりが進められている。この建物は約２年をかけ、周辺の歩道整備、調整池の設置、並木や菜木などを配置することで地域環境の改善に力を注ぎ、景観を一新させた。周辺の住宅や学校と共存して、新しい工場のあり方を提示したと言える。

また日本で唯一の「くすりづくりの全てを見せる工場」が大きな特徴である。薬剤に関わる専門職の方はもちろんのこと、患者、地域住民も見学に訪れる。見学ルートは生産工程と同様とし、精密でクリーン、安全なくすりづくの全容が見られるようになっている。建物の構造は製剤プログラムに合わせて、最新の製造設備機器が縦横に往来できるよう計画されている。作業する人とくすりは製剤課程で完全に分離され、それを俯瞰するかのように見学者ルートが考えられている。

一般建築物の部

■ 市原湖畔美術館

最優秀賞

《美術館の再生に見る新たな世代の建築文化の息吹き》

バブル期に建てられた公共施設は、美術館をはじめ数知れない。その後約20年、激しい時代・経済の荒波を経てその存在理由を問われているものが少なくない。この「市原湖畔美術館（旧市原市水と彫刻の丘）」もその一つであり、プログラムも含めた本格的なリニューアルが計画された。

幸いだったのは、プロポーザル方式によって選ばれた建築家が、若く将来を嘱望されるデュオであったことだ。彼らの全力を注いだ設計アプローチは、単なる施設のリニューアルではなく、既存２次部材をすべてはぎ取った上で、内外の空間的連繋を新たに読み取ることから始まった。そして、ダム湖の畔の丘の上という立地条件を最大限に生かしながら、豊かな展示空間を再編集したことが特筆される。その結果、もともと内包されていた複雑な回遊動線が外部との伸びやかな関係性を獲得し、現代美術の多様な表方法の展開を可能とした。作者等が標ぼうする新たな要素としての「アートウォール」は、亜鉛メッキ折版が持つ軽くかつ鈍い質感とともに以前のＲＣ建築の姿を一新した。その効果には建築的収まりも含めて賛否両論があるだろうが、若々しい建築的表現としてけれん味がない。

ちょうど現地調査の時期に、原広司氏自身の写経を中心とする膨大な企画展示が開催中であった。その重たく優れて宇宙的な広がりを持つ展示は、多様な動線と空間に誘われながら、新たな光と命を吹き込まれた美術館の中にあって、見る者の心を奪う。交通の便の悪さにも負けず、地方の公共施設として新たなプログラムが持続的に展開されることを祈りたい。

▷所　在　地　市原市
▷建　築　主　市原市
▷設　計　者　カワグチテイ建築計画
▷施　工　者　山内工業株式会社

一般建築物の部

■ 千葉大学ゐのはな同窓会館

入賞

《由緒あるキャンパスに舞い降りた白い襞の小ホール》

１３５年の歴史がある医学部の同窓会館として、小ぶりで清楚なモニュメントが生まれた。主な施設として存在感のあるシンボリックでキュービックなホールをはじめ、低層部の合宿施設等、すべての外壁は真っ白に塗られ、古い医学部キャンパスの中で異彩を放っている。緩陰の中に舞い降りたようなホールは、作者が言う人体の肋骨のアナロジーとして与えられた深くピッチの狭い庇の構造体が特徴的である。写真では大きなスケール感を見せるが、現場に立つと思いの外可愛らしい視覚的効果が印象的だ。あの「室生寺」の五重の塔を誰もが想起することだろう。配置上の軸線に関する記述もあるが、現場に立つとそれほど強く意識されることはない。建物の関係性や内部空間の機能よりも、この外観のイメージが全てを決めたのではないか。

生物体の建築的表現は、近代・現代建築の中でも時折試みられてきたことだ。しかし、この作品ではモダニズムの直線的な抽象性が凌駕し、有機的な生々しさや複雑さは全く感じられない。どこまでも白い全体の意匠がさらにそれを強調している。この秀作が長く美しく使われることを願いたいが、そのための持続可能な維持管理の仕組みをぜひ構築してほしい。

▷所　在　地　千葉市中央区
▷建　築　主　国立大学法人千葉大学
▷設　計　者　鈴木弘樹＋田中明久
▷施　工　者　山内工業株式会社

住宅の部

■ HouseinTSUTSUMINO

優秀賞

《江戸川の眺望。スロープテラスのある住宅》

この住宅は江戸川を望む住宅地の一角に位置し、緑地公園を介して河川敷が目の前に広がる環境にある。２階建て鉄筋コンクリート打放しのひとまわ目につく建物である。

アプローチは玄関を兼ねたガレージと２階カフェへの直通階段で、ガレージ内の音楽スタジオとカフェの空間は建築主ご夫妻のスペースである。それらがプライベート空間と緩やかに分節され機能している平面計画となっている。

個室を仕切る壁は平面計画上、様々な角度から煩雑に見えるが、ガレージから入り、屋根スラブを兼ねたスロープテラスまで上がって行く空間は変化に富んでいて、引き込まれるように楽しい。ガレージはリビングと前面道路側にも開放され、ときに賑やかなパーティスペースに変わるという。屋上のスロープテラスはリビングとカフェからつながる屋外空間である。

スロープテラスをさらに上へ上っていくと、江戸川を望む眺望が見事である。テラスの段差の隙間が開口部となり、内部からは空や緑が切り取られたように垣間見える。この住宅の良さは二次元の図面では伝わらない。ずれていく平面と断面が作り出す空間が絶妙なのである。

加えて施工精度が優れている。基本的に内外壁はコンクリート打放し、熟練した高齢の型枠大工の仕事であったそうだが、設計監理者と施工者が細心の注意を払って進めた共同作業であったことが想像できる。清々しさを感じさせる空間に仕上っている。

建築主から「こんな感じの家に住みたい」と設計者を探した経緯をお聞きしたが、空間を満喫して暮らしている様子が覗えた、完成度の高い住宅である。

▷所　在　地　野田市
▷建　築　主　橋本氏
▷設　計　者　布施茂／fuse-atelier
▷施　工　者　株式会社長野工務店

一般建築物の部

■ 学校法人渋谷教育学園幕張中学・幕張高等学校30周年記念棟

《新しい教育環境の創造》

千葉市美浜区若葉に計画された図書館と芸術・情報系の特別教室を複合させた新たな学習の場としての機能を持つ

入賞

建築物である。建築面積1976.75m²、延べ面積６０７４.３４m²、４万から約12万冊に収容書籍数を増やし従来からの図書館機能を拡充することに加え、コンピュータ・音楽・アートなどの教室を同一空間内に設けて視覚的にも連続させることで、自調・自考という建学の精神を具現化した学習センターとしての図書館、階段室の吹抜けを利用した自然換気・テラス部の緑化等環境に配慮した計画である。三角形の吹抜けをもつスチューデントホールは、上下階のホールや地階の図書館とも視覚的に連続している。方向性を持たない安定した自然光による内部空間。三角形の断面がピロティーの上に浮かぶ象徴的な形態は、自ら調べる知層としての図書館の上部に、自ら考える機能を持つ楔形の空間を乗せた記念館である。西側斜面状の三角形断面により図書館へ、間接光を取り入れると同時に西側グラウンドへの日射確保やグラウンドに吹く風を受け流す効果も生み出している。

▷所 在 地　千葉市美浜区
▷建 築 主　学校法人渋谷教育学園
▷設 計 者　株式会社竹中工務店
▷施 工 者　株式会社竹中工務店

快適なまちづくりの旗手

千葉の魅力高める作品群

千葉県
森田健作知事

千葉県建築文化賞は、建築文化や居住環境に対する県民の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されました。

第21回目となる今年度は、52点の応募をいただき、千葉県建築文化賞検討会議による検討結果を踏まえ、最優秀賞1点、優秀賞3点および入賞5点の合計9点を選定いたしました。

受賞作品は、安全で快適な、豊観、環境に配慮するだけでなく、本県の建築文化の向上につながるもので、千葉の魅力を高め、地域の活性化に直結する素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、地域で親しまれ、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

今後とも県では、微意まさともに、次世代を担うこどもたちが「千葉で生まれて、住んで、働いて良かった」と誇りに思えるような魅力あふれる「日本一の美しい千葉県」を築いていけるよう、全力で取り組んで参いりますので、ご理解に協力をまさしく お願いいたします。

９作品を厳選

一般建築物の部

■ 恋する豚研究所

優秀賞

《福祉と豚のしあわせな関係》

寄せ棟の赤い屋根が重なり合う佇まいに引きつけられて目をやると、「恋する豚研究所」の看板に出会う。レストランもある。ネーミングに好奇心をかきたてられ、ちょっと特別な豚が食べられそうで、立ち寄ってみる人が少なからずいるのではないだろうか。

主階である２階ののびのびした空間がいい。杉林の緑にすっぽり包まれ、レストラン＋売店と事務所がある。これら屋内空間は大きくとられた屋外空間でつながっている。事務所もレストランと同じくらい居心地がいい。真ん中に薪ストーブとキッチンがあって、窓一面に里の風景が広がっている。

１階は主に食肉加工場である。継続就業支援Ａ型の施設で、現在１６人の障がい者が働いている。恋する豚プロジェクトの原点は、福祉に携わる人の熱い思いだった。わが国の障がい者平均賃金は月額１．３万円だが、１０万円は支払って誇りをもって仕事してもらいたい。これに、地元の養豚業が結びついた。養豚業者は生産性向上の限界を感じ、付加価値を模索していた。福祉と農業が知恵を出し合ったことにより生まれた新しいかたちの里の景観である。おいしい豚であって、さらに障がい者雇用のささやかな助けになるとなれば、少し値段が高くても思わず応援したくなる。ビジネスクラスの機内食で採用されたという。

車でアクセスする施設ではあるが、駐車場の配置が工夫されている。もう少し樹木が育てば、町外れの瀟洒なヴィラに来たような姿に育っていきそうな気配だ。恋する豚たちがほんとうに出迎えてくれたらもっといいのに、とも思うが養豚場の現場はまた別の世界なのだろう。

▷所　在　地　香取市
▷建　築　主　社会福祉法人福祉楽団
▷設　計　者　アトリエ・ワン
▷施　工　者　石井工業株式会社

一般建築物の部

■ 成田高等学校１号館

優秀賞

《「空・緑・風」確かな自然環境と調和する校舎》

この校舎は、明治31年創立の成田高等学校の創立115周年記念校舎整備事業として完成した。老朽化した校舎に分散する中学・高校の教室、事務機能、職員室の一体化を図り、複雑な生徒動線の改善等を目的として、敷地内に中学・高校の機能を一つにまとめ「文武両道」の校是のも、成田山公園を背景としてスマートな校舎が完成した。敷地北側の急斜面に対する安全性の確保も同時に図られている。また、従前からの植栽を可能な限り移殖して外構の再整備を行うことで、既存の自然環境を生かし、学園の歴史をつなぐ計画となっている。

正門を入ってまず目に付くのが建物正面に設けられた大階段。正面から丘の上の校舎へと階段を上ると、その先にはガラス張りのホールが生徒を迎え入れる。１日の期待に満ちた始まりを予感させるような巧みな平面計画である。

内部は、校舎全体をつなぐ「吹き抜け空間」を中心に計画され、その１階に図書室・学習・進路指導を融合したラーニングセンターが配置されている。多彩な学習機能やガラス張りの相談コーナーを吹き抜け周囲に配置することで、生徒と生徒、生徒と教師とのコミュニケーションを高め、自ら学習する環境が計画されている。南面する教室と北側に成田山公園のある立地条件を生かし、自然採光と通風を活用するとともに、将来の教育環境の変化に対応できる校舎として計画されている。

門前町の中の限られた敷地での建て替え工事、既存校舎を活用しながらの綿密な計画の実績も高く評価したい。

▷所　在　地　成田市
▷建　築　主　学校法人成田山教育財団
▷設　計　者　株式会社山下設計
▷施　工　者　清水建設株式会社千葉支店

住宅の部

■ 篠原久雄邸

入賞

《人も物も大きな環境の中で存在することを楽しむ》

大型商業施設に道一本隔てて建っているこの住宅は、建築面積８０．７９m²、延べ面積１２４．３６m²、木造２階建の専用住宅である。環境負荷の低減に配慮され、その他、独自の取組や提案がなされている。構造材から仕上げまで、徹底したサンプスギの使用と、冬は薪ストーブ、夏は天窓からの重力換気によってエアコンなしで暮らすというさんむフォレストの提案により実現した。さんむフォレストというグループは、サンプスギですまいを造る地産地消のすまいづくり運動を続けてきた。当初の木材利用を森林再生につなげようという着想が、運動を続ける過程で資源循環のすまいづくり、地域づくりの運動へと変わっていった。地域の資源を扱う運動は当然地域の風土にかかわる。運動は、地域全体の資源循環の問題として捉えなければ森林だけが単純に再生することは、ありえないのだと気づかされた。外壁もすべてサンプスギの赤身板張りで、まったく塗装はされていない。この住宅での塗装は内部床の植物油と一部の建具以外になく、それ以外はすべてサンプスギの素地のままである。外部の杉板はいずれ劣化し、シルバーグレーに変色する。地域づくりにつながる表現として、隣の大型商業施設とは対象的な佇まいとなっている。

▷所　在　地　印旛郡酒々井町
▷建　築　主　篠原氏
▷設　計　者　有限会社榊田綜合建築設計事務所
▷施　工　者　石井工業株式会社

住宅の部

■ 牧の原団地　１－21号棟

入賞

《「への字」住棟を分割して耐震化》

不整形な平面形状の建物は、偏心が大きく地震時にねじれが生じるため、耐震の課題を抱えている。この住棟は「への字」をしているが、折れ曲がったところで切り離し、整形な２棟の板状住棟とすることで偏心を解消している。

不整形住棟の耐震改修は、標準住棟に比べてはるかに難しい。縦動線が１箇所のみである１１階建ての住棟において、折れ曲がった部分の２階から１１階まで、１スパン１０戸を縦に切り取る大手術を施している。この工事を、施工上の高度な工夫により、居住を継続した状態で入居している人たちに負担をかけないかたちで実現させている。

大量の住宅需要に応え、日当りがよく健康的な住環境を迅速に整備するには、板状住棟の並行配置が最も合理的かつ効率的だった。このように大量生産された住宅団地ではあったが、団地の中心となるところはアクセントとなるようデザインされている。牧の原団地では、買い物広場を挟んで１１階建ての住棟が向き合っており、その一方を「への字」とすることによって特徴ある広場空間を創出している。団地のシンボルとなっている不整形な住棟のデザインを損なうことなく、耐震性を向上しようとした困難な挑戦を評価したい。

▷所　在　地　松戸市
▷建　築　主　独立行政法人都市再生機構
▷設　計　者　株式会社窓建コンサルタント
▷施　工　者　株式会社淺沼組東京本店

綜合建設業
100年めざしてあと２年
山内工業株式会社
YAMAUCHI
代表取締役　山内　一信
〒290－0225　市原市牛久922-2　☎0436－92－1221　FAX0436－92－3409
http：//www.yes-yamauchi.co.jp

おかげさまで創業１１１年
総合建設業
石井工業株式會社
代表取締役　石井良典
香取市佐原ロ2097-38　TEL 0478-55-1511
ＵＲＬ：http://www.ishiicon.co.jp